

聖霊シリーズ「異言を解き明かす力」

1A 公における異言の賜物

1B 解き明かし

2B ベルシャツアル

2A 解き明かしの必要

1B 神に語る異言 1-5

2B 意味のある言葉 6-13

3B 個人から教会へ 14-19

4B 信者のための徴へ 20-25

5B 秩序ある礼拝 26-33

本文

私たちの聖霊シリーズの学びは、「異言を解き明かす賜物」に入ります。「1コリント 12:10 ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。」私たちはこれまで、コリント第一 12 章にある御霊の賜物が列挙されているところを読みました。8 節から 10 節までには、九つの賜物が列挙されていました。今回は、28 節に書かれている「助ける者」また「治める者」を見ていき、それからローマ 12 章に列挙されている賜物も見ていきたいと思えます。

前回の異言の賜物のところでお話したように、異言とその解き明かしが御霊の賜物の最後に列挙されていることは意味があるということをお話しました。それは 13 章において、初めに異言の賜物が取り上げられ、愛がなければ無に等しいということにも表れています。そして 14 章において、コリントにある教会では異言を乱用していたという背景があるのです。そして最後の解き明かしの力については、異言と共に用いられる賜物なので九つのうちの最後に列挙されているのです。

1A 公における異言の賜物

1B 解き明かし

コリント第一 12 章 10 節に出てくる、「解き明かし」のギリシヤ語は ἐρμηνεία (hermeneia ヘルメネイア) といいます。聖書本文を解釈する、「解釈学」というものがありますが、これを英語で hermeneutics といいます。ですから、そのとおり「解き明かし」という意味です。したがって、異言を解き明かすという時に、それは必ずしも通訳ではないということを知る必要があります。一語一句をそのまま私たちの知っている言葉に直すことでは必ずしもないことを知る必要があります。そしてこの賜物は、異言の賜物と同様、その語られている外国語を本人が理解していなくても、超自然的に与えられる力です。

2B ベルシャツアル

解き明かしをすることについては、新約聖書においてここコリントにある教会以外には事例が見つかりません。しかし旧約聖書にはあります。夢を解き明かしたヨセフがおり、またダニエルがいます。ヨセフはパロの見た夢、七頭の肥えた牛とその後の痩せこけた牛、七つの穂とその後のやせこけた穂を解き明かしました。ダニエルは、ネブカデネザルの見た夢、人の像や大きな木が根株から切り倒される夢を見ました。

けれども、ダニエルはまた、文字を解き明かしています。バビロン崩壊の直前、王ベルシャツザルは、大宴会を開いていました。その時に人間の手の指が現われて、文字を壁に書きました。根ベルシャツザル王は怯えて、この文字の解き明かしを行なわせるため、知者たちを呼び集めましたが、だれも解き明かせませんでした。そこでダニエルが呼ばれました。まず、文字が当時使われていたアラム語ではありませんでした。さらに、文字だけ読んでも意味は分かりませんでした。ダニエルが解き明かしました。「メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン」です。そのまま訳すと、「数えられた、数えられた、量られた、分割された」となります。これではさっぱり分かりませんね。ダニエルは、こう解き明かしたのです。「5:26-28『メネ』とは、神があなたの治世を数えて終わらせられたということです。『テケル』とは、あなたがはかりで量られて、目方の足りないことがわかったということです。『パルシン』とは、あなたの国が分割され、メディアとペルシヤとに与えられるということです。」このように、解き明かしは必ずしも通訳や翻訳ではありません。そのような時もありますが、語った異言の言葉よりも長くなる時もあるし、短くなる時もあります。

2A 解き明かしの必要

異言の解き明かしを説明するのに、どうすればよいかと迷いましたが、そのままコリント人への手紙第一 14 章を読み進めてみましょう。

1B 神に語る異言 1-5

14:1 愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。14:2 異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも聞いていないのに、自分の霊で奥義を話すからです。14:3 ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。14:4 異言を話す者は自分の徳を高めますが、預言する者は教会の徳を高めます。14:5 私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明かしをして教会の徳を高めるのでないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています。

パウロは、この章において異言よりも預言をすることをコリントの人たちに勧めています。異言を禁じてはいけないけれども、預言をすることを熱心に求めなさいと言っています。その理由と根拠を彼は語っています。その中で、「異言を話す者がその解き明かしをするならば、教会の徳が高まる」ということを言っています。

異言の特徴は、人ではなく、神に語ることです。しかし教会においては、人々が神からの言葉を聞くことによって、初めて徳が高まります。異言でも徳を高めますが、それは自分の徳が高まるこそすれ、他の人の徳を高めることはありません。その意味しているところが分からないからです。ですから異言は至極、私的なものです。主に対して祈り、賛美する時に、自分が個人で行なう時に有用なものです。けれども、異言の解き明かしをすれば、その意味を私たちの知性で解することができるので、解き明かしがあれば教会でも用いられることができます。

聖霊の働きを強調する教会、しばしばペンテコステとかカリスマと呼ばれる教会の中には、公の礼拝の時に異言を語ることもさせています。私たちはそれは聖書的ではないと思っていますが、けれども異言の解き明かしがあればそれは良いのかもしれませんが、しかし、異言が語られた後に、その解き明かしが、「主はこう仰せられます。あなたは、わたしの子どもだ。あなたは立ち上がりなさい。今、ここで任されたことを忠実に言いなさい。」というような言葉になることがあるそうです。教会に対して主が語られている言葉です。しかし、それは解き明かしではないでしょう。預言であれば、それは教会に対して語られているのですが、異言の解き明かしであれば、神に対して語っています。「主よ、あなたをほめたたえます。私はここで、あなたに仕えます。」というような、主に語りかけているものになるはずですが、ですから、異言を語った後に、解き明かす人は実は、解き明かしではなくて預言を語ってしまっている、ということになるのかもしれませんが。

2B 意味のある言葉 6-13

14:6 ですから、兄弟たち。私があるがたのところへ行っても、黙示や知識や預言や教えなどによって話さないなら、あなたがたに何の益となるでしょう。14:7 笛や琴などいのない楽器でも、はっきりした音を出さなければ、何を吹いているのか、何をひいているのか、どうしてわかりましょう。14:8 また、ラッパがもし、はっきりしない音を出したら、だれが戦闘の準備をするでしょう。14:9 それと同じように、あなたがたも、舌で明瞭なことばを語るものでなければ、言っている事をどうして知ってもらえるでしょう。それは空気に向かって話しているのです。14:10 世界にはおそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばなど一つもありません。14:11 それで、もし私があることばの意味を知らないなら、私はそれを話す人にとって異国人であり、それを話す人も私にとって異国人です。14:12 あなたがたのばあいも同様です。あなたがたは御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい。14:13 こういうわけですから、異言を語る者は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。

ここにもでてきました、異言を語るのであれば、その解き明かしができるように祈りなさいということ。言葉が分からないのだから、解き明かしによって分かるようにして教会全体の徳が高まるようにしなさいと勧められています。

3B 個人から教会へ 14-19

14:14 もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。14:15 ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。14:16 そうでないと、あなたが霊において祝福しても、異言を知らない人々の座席に着いている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。14:17 あなたの感謝は結構ですが、他の人の徳を高めることはできません。14:18 私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、14:19 教会では、異言で一万語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性を用いて五つのことばを話したいのです。

異言の祈りと賛美について、その意味するところ、特徴を説明しています。異言の性質を理解するのにとても大切なところです。それは、「霊」において祈るあるいは賛美することです。それに対して「知性」は実を結ばない、つまり自分自身、その口から出てくる言葉が理解できないということです。今日の聖霊の賜物の働き、異言などの働きは終わったとする人々の解釈では、「異言」というのは単なる「舌」という意味で、舌は全ての人々が持っていて、発することができるというものです。しかし、それであればどうして「知性」では実を結ばないことになるのでしょうか？そのまま解釈すれば、異言というのは確かに「異言」であり、自分は語っているけれどもその意味が分からないのです。

ですから、霊においては徳が高まります。自分の霊が神との親しい交わりに導かれます。けれども、それは他の信者には当てはまりません。意味が分からないのですから、自分が神に感謝しても相手にはその感謝が分からないのです。それで、預言など、知性を使った言葉を語ることの重要性をパウロはここで話しています。

4B 信者のための徴へ 20-25

14:20 兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。14:21 律法にこう書いてあります。「『わたしは、異なった舌により、異国の人のくちびるによってこの民に語るが、彼らはなおわたしの言うことを聞き入れない。』と主は言われる。」14:22 それで、異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。けれども、預言は不信者でなく、信者のためのしるしです。14:23 ですから、もし教会全体が一か所に集まって、みな異言を話すとしたら、初心の者とか信者でない者とかがはいつて来たとき、彼らは、あなたがたを気遣いだと言わないでしょうか。14:24 しかし、もしみな預言をするなら、信者でない者や初心の者がはいつて来たとき、その人はみな者によって罪を示されます。みなにさばかれ、14:25 心の秘密があらわにされます。そうして、神が確かにあなたがたの中におられると言って、ひれ伏して神を拝むでしょう。

22 節で、異言は不信者のための徴だと言っています。それに対して預言は信者のための徴で

す。これは、異言を聞いても、その言葉を理解することができないから、初心者の方が教会に来て、それで悔い改めることができないということです。不信仰のままに留まらせてしまうではないかということです。その一方で、預言であれば、その人の心にある秘めたものが、その知識の言葉によって明らかにされて、それで悔い改めに導かれて、神を信じるようになるということです。

けれども、異言の解き明かしを主が用いられて、人を悔い改めに導いたという証しがあります。チャック・スミスが牧会していた教会でのことです。少人数だったので、自由に座るような、形式ばらない形にして、聖霊の働きを待ち望むようにさせたそうです。一人の姉妹が異言で語りました。それは、とても格調高いフランス語でした。チャック本人は異言の解き明かしの賜物を持っています。けれども、フランス語も少し理解できるそうです。ですから、超自然的な賜物と知性とが絡み合っていて、解き明かすのを控えたそうです。けれども、奥さんのケイが立ち上がり、それを解き明かしました。すばらしい、主への感謝、賛美でした。

そこに、ある信者が連れてきたガールフレンドがいました。まだ主を知らないユダヤ人です。けれども彼女はフランス語を話します。問題があるというので来たのですが、一人がフランス語で話し、もう一人が全く正確に、フランス語を英語に訳しているのを見ました。(この場合は、一語一句、正確に訳していたそうです。)それでチャックが礼拝後に、彼女の相談の乗ろうとおもって来ました。けれども彼女はまず、礼拝中に起こったその現象について尋ねました。チャックは答えました。「個の二人は、どちらもフランス語を知らないのですよ。」それで彼女は、「問題を話す前に、まず主イエス様を信じないといけません。」それで彼女はイエス様を受け入れました。ついでに問題も解決されたそうです！

この場合は、解き明かしの賜物によって異言が信者のための徴になった事例です。異言だけであれば信じなかったかもしれないのが、その解き明かしを聞いたことによって悔い改めに導かれたのです。ここのコリントの教会の状況には合っていないかもしれませんが、けれども意味を知ることによって信仰に導かれるという点では有効でしょう。

5B 秩序ある礼拝 26-33

14:26 兄弟たち。では、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まる時には、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい。14:27 もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても三人で順番に話すべきで、ひとりでは解き明かしをしなさい。14:28 もし解き明かす者がだれもいなければ、教会ではだまっていなさい。自分だけで、神に向かって話しなさい。14:29 預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。14:30 もしも座席に着いている別の人に黙示が与えられたら、先の方は黙りなさい。14:31 あなたがたは、みながかわるがわる預言できるのであって、すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができます。14:32 預言者たちの霊は預言者たちに服従するものなのです。14:33a それは、神が混乱の神ではなく、平

和の神だからです。

パウロが具体的に、指示を与えています。ここでの大事なことは、一度にいろいろなことをしないということです。それぞれが足って、語ります。他の人は待っています。そして異言を語るのであれば、一度に語るのではなく、一人一人が語り、そして解き明かしをします。二人か三人語っても、だれも解き明かす人がいなければ、神に向かって自分だけで話なさいと勧めています。ここでも、異言は自分だけで用いる賜物であることが強調されています。けれども解き明かしがあれば異言も公に場で有効なのです。

そして、預言者たちに、預言者たちの霊は服従すると言っています。これは、意志によって預言や異言を語り始めることができ、また止めることもできるということです。その語っている舌、また与えられる思いというものがありますが、それを自分の意志で制御できるということです。そして神が平和と秩序の方であることを話し、結論は 39 節、「それゆえ、わたしの兄弟たち。預言することを熱心に求めなさい。異言を話すことも禁じてはいけません。」となります。

私は異言の解き明かしの賜物は持っていません。けれどもチャック牧師は持っていたようで、こう説明しています。「私がこの賜物を使うとき、まるでそれが英語で語られているように何が言われているのかを理解します。思いや称賛、感謝が私の思考に入ってきます。」けれども、一人一人、賜物の働きは異なるので、同じように用いられるわけではないことを強調しています。しかし、私たちは求めていきたいですね。異言を語る者は、解き明かしができるように祈りなさいとパウロは言ったので、第一に、異言の賜物を求めて、それをを用いていくこと。第二に、解き明かしの賜物を求めて、教会で異言の賜物を用いている人の手助けをすること、でありましょう。